

に聖祖は入道の心事と消極的信仰を知つて、殊更御立寄にもならず、寧ろ勞はる御意にて認められたものである。況んや興師を案内として十二日鎌倉を御出發、途中一日の淀みもなく十七日波木井に御着、直ちに富木殿へ御報ありて

『十七日コノトコロ、イマダサダマラズトイエドモタイシハコノ山中心中ニ叶ヒテ候ヘバ、シバラクハ候ハンズラン』(續一ノ一四六)

と述べられてゐるのを見ても、斷じて行き當りの御入山ではあり得ない。

蓋し聖祖の御行動には多くの門下の従ふ事であるから壯る復

獨居不三昧

提言

私の云はんとする所は學究的に生れ出でたものでもない。又と云つて未だ日淺き自己の生活を愚痴らんと思ふのでもない。ただ急に學窓より出で、實生活に入つた時、如何に理想に遠い自己の生活を營み、其處に異つた理想を抱えて行かなければならないかを云はんとするのである。これも亦諸君通途の印象であり感想であるとも信じない。只私と云ふ小さな人間と其の環

雜な事情を有つてゐる。故に聖祖の言外の言を拜すべきである

六、結言

已上、要するに南部實長の社會的地位から、聖祖の身延御入山の事實を論じ、『旁存ズル旨』の一考察を試みた心算である。

即ち佐渡に於ける幾曲折の幕を閉じて歸倉せられた聖祖が三諫を終つて身延に御入山された事は、彼の了義達師が云ふが如き、遽かになされた厭世的逃避や、世間的隱遁ではなく、實に諸多の客觀的情勢によつて佐渡御在島中、既に豫定された御行動であつたのである。

中澤要實

境におかれた時かく感じかく思つた事を提言するのである。

農村寺院生活

祖山の學窓を巢立つて此處に二度目の秋を迎へた。そして今春一年ぶりで祖廟に詣で此處に過去五ヶ年間、殆んど満足の留守居もない空寺に假入山と云ふ哀れな狀態で住職したのであるが大きな伽藍のみの貧寺、外面は、いはる譯ではないが堂々と云ひたい。中味はガランで何もない。檀家數は二十軒あるなし

さればと云つて田畑宅地が澤山ある譯でもない。どうして生活して行くか。所謂「自力」にある。農村寺院に於ける自力生活とは如何なる方法か、養蠶か、養鶏か、果樹栽培か、悪口に云ふ「百姓坊主」の姿になり切つて行くのが農村寺院僧侶の生くべき道である。寺院の家族制は經濟の個性を願ふやうになつてくるのは必然である。百姓坊主と笑ひ給ふな。生きんとする農村寺院僧侶の涙ぐましくも哀れな生活戦線なのである。信仰的に生きよ！宗教家は讀誦唱題の信仰による所に經濟的にも眞の安定が生れると云ふかも知れない。かく云はれると信仰がないものゝやうに聞ゆるが決してそうでない。農村寺院僧侶と農民の中にはなか／＼信仰の厚いものが数多い。なれどもそれにて生活するには餘程方便的な眞の神通力を有するか、或は巧みなインチキが／＼つた事か兩極端による外はない。

普通人が眞面目に而も安定せる生活を營むには正直に所謂百姓坊主の葬式係りと云つた生活が間違ひない。がこれで一体宗教家の本分であらうかとは思ふものゝ現在の社會制度下に於ける農村人心と經濟とは宗教家をして眞の完教的生活に生かす事をゆるさない。それは農村に生活するものゝみの知る苦惱であり悲哀である。

農村寺院と人心

農村人心は純朴であると云ふ。成程純朴である。されども昔時の如く無智より出ずる純朴なるものは少い。それは天保時代

の遺物とでも云ふべき老者のみで、それ等は「カタクナ」と云ふ性格に生きてゐる。若いものは純朴の姿は少く思想も都會化してゐる。とは云ふものゝ都會人程浮ついた明朗性を有してゐない。堅實な而も反面にはヒガンダ思想を持つてゐる。宗教をこれ等の人心に如何に植えつけて行くか。それには寺院の年中行事を或は諸式を寺院中心に復興し改造して盛り立て、行く事である。常に寺院は農村民の慰安所であり、悩みの解消の場所であるやうにしたい。生活に慰安と娛樂の機關の少い農村に於いて農村人心をして宗教的に歡喜を有する生活をなさしめる事が大切である。なれども經濟的微弱な農村寺院のその機關を機關化する事が出来ない所に行つまりがある。かゝる思想的立場より私はこの間、宗祖日蓮上人の御會式を執行した。宗祖への御報恩！檀信徒舉つて異体同心の姿を表示して行くのが、あの萬燈煉行列である。全村火の海と化した賑ひ、當寺開闢以來と村民は喜びあふれてゐた。寺門發展の爲、宗門弘通の爲、土地開發の爲、最も意義深く大切な事である。なれども、そのあとたゞちに迫る恐慌がある。經濟的破綻であり、所謂赤字である。これをどうするか、満足な檀信徒が少く、當時の法務も少い寺院、つくのひ切れぬ悩みがある。仍て大きく賑かにするより靜かにしてゐて利を取れ主義に流れざるを得ない。其處に宗門の發展と弘通が阻止されるのである。これでは何處に宗祖の恩恵によつて生活する宗教家の意義がある。宗祖が「聖僧の恩は凡僧に報ずべし」と云はれたからと云つて、かゝる生活者に

安定を與へんとの意味では勿論ない。がと云つて、この經濟的破綻をつぐのふ餘力者は殆んど少い。かゝる結果を生み出す寺院經濟の苦しみは何處に源泉があるかと云ふに、それは徳川時代の支配下にあつた餘力ある寺院の姿を常に農村人民は執着しかゝるものであると思つてゐる。然るに反して録付知米もない而も税の負擔の多い寺院の現在であるだけに苦しみである。これで何處に人心の木鐸となり指導者となり行くであらうか。もつと自覺せよ、爲政者よと呼びかけて見たい。この聲決して宗教を政治的道具たらしめたいと云ふ意味で云ふのではない。

學窓への言葉

哀れな農村寺院の姿と人心、これを救ふのは吾等の生命であるとか大く理想を持ち行かれるのは誠に結構であるが、實際は常に理想家を入れない。農村人心を救済して行くには寺院人も農村人心に同化して行く所に眞の救済の道があると云ふかも知れない。それは机上の論であり、この實行者の大体は百姓坊主の姿になつて行くのである。農村寺院にあるものは高く低く所謂中道を歩む精神が生活が完全に行ひ得るものにして始めてなし得るのである。徒らに農村人心化と云ふ事は結局前述の如く生活の爲に生活する百姓坊主になる故、要は農村人心をよく知りぬく事だけに大切である。學窓にあつて農村の寺院とその現狀を眺むる時、誰しも思ふ。「吾人はかゝる象牙の塔たる宗學なぞに没頭してゐる時ではない」とされど心せよ、諸氏よ、學問

は學問の爲にするのみと思ふかも知れないが、それは大なる誤謬である。「用の爲にはしばらく用を忘れざるべからず」とある哲人の言葉、休し味ふべきである。吾等が一度社會に出ずる時學問の爲の學問と思つてゐた宗學等が如何に力強い源動力であるかを痛感する。その時如何に自己の無學なるかを慨かれるのである。生活の爲の百姓坊主になり切つて行くならいざ知らず宗教家として理想に生き、意義ある生活を送らんと思ふものは心してクラシツクな本化教學を徹底的に味讀せられたい。現代社會に對する宗教の活用化は必然と内出するであらう。

殊に當縣下は他宗權門が多い。それに對して我宗が誇り得るのは本化教學が宇宙の大眞理性を實際に有して居るからである此處に於て自づと宗祖の有名な四箇格言も高聲に唱へ得るのである。

故に學窓の諸氏よ、あくまでも眞學に本化教學に没頭し、其の眞理性を學究的に味つて頂きたい。一度社會の實踐に立つ時本化の教相門が如何に學問的な觀念的なものであるばかりでなく實踐的に生活の上にすぐれておるかを體驗し得る。本化の實踐門が唱題行にある事は一般人心の生活の力である事を知り得ると思ふ。

其處に「宗教は生活の力なり」の標語の下に「力の宗教」とは日連大上人の宗教である。と教觀不二の教學の有難さと思ひつゝ、獨居不三昧の中に三昧を求めてゐる。